

世界遺産アカデミー認定講師 File No.25

このコーナーでは、世界遺産アカデミーの啓発活動にご支援いただいている世界遺産アカデミー認定講師の方に毎回スポットを当て、お話を伺います。第25回の今回は、古代シルクロードから飲み会で使える世界遺産のトリビア(小笠原と日本の排他的経済的水域、AKB総選挙とアイスランドの直接民主制、富士山が自然遺産ではない理由)まで、ユニークで様々な引き出しをお持ちであられる、WHA賛助会員の細谷正文(ほそや・まさふみ)さんです。

——「My世界遺産」が、 ひとつでもふたつでも あれば良い

現在、都内の日本外国語専門学校の講師として、「世界遺産検定3級対策講座」を週2コマ、担当しています。1クラス40数名で、世界遺産検定の合格を目標に、本講座にエントリーしています。対策講座と銘打っていますので、WHA作成のPowerPointスライドに沿って進めています。世界遺産検定は今や観光業界でも重視されていますから、学校側も、本講座への取り組みに積極的です。前期・後期に各9回の講座を設けていますが、

東京都だと知っている学生も少ない。そんな彼らが将来、国内外のお客様に世界遺産の魅力を伝えられるよう、しっかり教えることに努めています。自分の言葉で説明できる「My世界遺産」が、ひとつでもふたつでもあれば良い。たとえば、「国立西洋美術館本館」のピロティ構造とは具体的にはどういったものなのか、ル・コルビュジエはどのような建築家だったのか。世界遺産を勉強しながら、日本を知る。世界遺産を通して、自分たちの歴史、文化、ルーツを伝えられるのです。外国人観光客に自国を説明できる人間こそ、観光業界が求める“人材”ではないでしょうか。

4月入学の学生たちがビジネスマナーを身に着け、講座終了時に就活生として身なりが整っていく姿を微笑ましく思います。

講座の総括として、最後の授業では、興味のある世界遺産について個人発表とグループ発表を行います。まだ18、9歳の彼らは、ハワイ、グアム、香港、シンガポールといったリゾート旅行経験者であっても、世界遺産旅行は殆ど未経験です。ソウルに行っても、宗廟ではなく、明洞でショッピングに垢すりエステ。実に学生らしいです。彼らにとって代表的な世界遺産というと、修学旅行で訪れた京都と奈良、日光。金閣寺は金箔で装飾されているのに、銀閣寺は銀箔ではない。



「音楽で巡る世界遺産」をテーマに語られたことも

その理由を細かく説明すると、食い付きが良いです。知っている場所は、関心の度合いが違います。残念ながら、白神山地、屋久島を訪れたことのある学生たちは今までいませんでした。小笠原諸島が

——シルクロードに魅せられて

2005年に放映された「新・シルクロード」も懐かしいですが、その元祖ともいえる1980年代の番組、「NHK特集シルクロード」は、私に強烈な印象を与えました。タクラマカン砂漠にNHK取材クルーが入り、シルクロードの歴史とともに、喜多郎のシンセサイザーの音楽をバックに、溜息の出る絶景が画面いっぱいに映し出されました。一瞬でシルクロードに心を奪われました。それから東洋史の勉強を始め、その大きな流れを感じ、二胡の調べを味わいながら長安、万里の長城、朝鮮半島、奈良と軌跡を辿るにつれて、世界遺産への興味が高まりま

した。

また、インドにも魅せられました。『タージ・マハル』は、この世のものと思えないほどの天国。喧噪のアグラの町からタージ・マハルに行き着くまでの道程の混沌との対比で、青い空に緑の庭園、両側の赤いモスク、白亜の廟は、最高の空間です。インドは聖と俗、すべて在るがままに共生する多様性が素晴らしいと思います。

もともと歴史や地理、文化、宗教が好きで、色々な本を読んでいましたが、それぞれピンポイントに特化された知識ばかりでした。世界遺産は、地政学や政治史と文化史と経済史を束のように織り交ぜた、総合的学問です。ひとつの物件を

掘り下げることで、さまざまな宗教や伝統、地域性などを捉えられます。世界遺産という核を得て、単体で散らばっていた知識が立体的に繋がりました。2007年に初めて世界遺産検定を受検し、2010年にマイスターを取得。現在は認定講師として、世界遺産の浪漫を伝える“語り部”を目指しています。

学生時代に音楽を専攻していましたため、世界遺産を語る際も音楽は欠かせません。特にヨーロッパの世界遺産は、クラシック音楽が合います。ノルウェーのフィヨルドからの眺めには、グリーク作・戯曲『ペール・ギュント』の「朝」。カプリ島からアマルフィ海岸の瑠璃色の光景には、イタリアン・カンツォーネ。エディンバラ城を臨みながらのメンデルスゾーン作・交響曲第3番「スコットランド」などは、いかがでしょう。創建当時のままの建造物は、現代を生きる私たちに、まるで音楽を奏でるかのように、歴史の奥深さを物語ります。なぜ造られたのか。どのような人たちが関わってきたのか。敦煌のように埋もれていた遺跡は、なぜ今まで発見されなかったのか。そして、



古代シルクロードの、壮大な民族の交流に想いを馳せて

何が探検家たちをそこへと向かわせたのか。私にとって、音楽と世界遺産は至福そのものです。交響曲のように、第1楽章、第2楽章と続く世界遺産の旋律が、最終楽章を迎えることなく、未来永劫、流れ続けることを、心から祈っています。